

—鳥取県中部農村地区について(2)—

鳥取女子短大 ○陶山孝子 竹内久美子

〔目的〕今回の調査は近年著しい日本人食生活の都市化、簡便化、洋風化の傾向が本県農村地区にどのように表れているかを検討することによって、今後の問題点を指摘するたのめ
 の有益な示唆を得たいと考へ実施した。〔方法〕オス報と同様質問紙法により本県農業の
 中心地帯である東郷町、関金町、大栄町に居住する主婦を調査の対象とした。有効回収率は
 74%である。〔結果〕20才代の農村の主婦が農業に従事する者は24.2%と少なく、兼業農
 家の農業は40才以上の主婦によって支えられている。調査対象者の夫は全国の郡部、中都市
 の夫に比し一家団欒の場である夕食を家族と共に摂る者が75%と多く、また70%の夫は
 主婦の調理に口出しせず、且つ70%の夫は自分が調理をすることは全くない。85%の夫は
 食事のあと片づけも殆んど手伝わない。甘所を任された主婦は果して調理が好きかと問え
 ば「あまり好きでない」者が半数を占め、調理時間も朝食は30分以下というものが20才代の
 主婦の76%を占めている。夕食の調理時間は1時間位であり、今後も調理のための時間労
 力は今のままとよいと考へている。自慢の手作り食心も「ない」主婦が半数強、特に
 20才代に多く都市の主婦との差が大きい。自慢料理は20才代では洋風調理、40～50才代
 は和風調理が多くそのオス位は漬物である。「よく漬ける」のは20才代40%、40～50才代
 65%、全く漬けない者は殆んどない。伝統的行事食である「赤飯」を炊いて祝う習慣は全
 国の郡部、中都市に比しよく伝承されて居り、殆んど主婦の手作りである、珍しい料理
 等も近所や親戚にわかる「裾わけ」の風習は20才代では少なく、この年代では自慢料理が
 少ないことと対応している。年齢の低い層ほど調理に自信のない傾向がうかがえる。